

国学院大学

教育開発推進機構 NEWSLETTER

教育開発ニュース

VOL. 24
NEWSLETTER

KOKUGAKUIN University 令和3年(2021)9月1日

目次

- [巻頭特集] 教育開発推進機構 新機構長・各センター長挨拶…………… p.2
 - ・教育開発推進機構長挨拶 石川 則夫 (文学部教授)
 - ・教育開発センター長挨拶 石川 則夫 (文学部教授)
 - ・共通教育センター長挨拶 捧 剛 (法学部教授)
 - ・学修支援センター長挨拶 東海林孝一 (経済学部准教授)
 - ・英語教育センター長挨拶 久保田正人 (教育開発推進機構教授)
 - ・教職センター長挨拶 石川 則夫 (文学部教授)
- [Report] 令和2年度 コロナ下における教職センターの取り組み…………… p.7
 - 坂入 裕一 (教職センター課長)
- 学生インタビュー「オンライン授業2年目を迎えて」…………… p.9
- 教員向け「令和3年度に向けた遠隔授業研修会」実施報告…………… p.14
- 教育開発推進機構彙報…………… p.16
- 啐啄同時 そったくどうじ ー編集後記ー…………… p.16

もっと日本を。もっと世界へ。

新機構長・各センター長挨拶

教育開発推進機構長挨拶

石川 則夫 (文学部教授)

令和3年度より教育開発推進機構長を拝命いたしました石川則夫です。文学部日本文学科に所属しており、近現代、明治以降の日本文学研究を専攻領域としております。どうかよろしくお願いたします。



さて、教育開発推進機構は、「國學院大學における研究教育開発推進に関わる指針」および「國學院大學21世紀研究教育計画」に基づき、建学の精神を具現化した教育体制を確立することを大きな目標と定めて、全学共通教育、教職・資格課程の教育力の向上と関連する知見の調査・研究とその成果を展開し、全学の教員、学生への支援活動を主たる責務としております。

教育開発推進機構は「教育開発センター」、「教職センター」、「共通教育センター」、「英語教育センター」、そして「学修支援センター」の5つのセンターで組織されており、それぞれに専任教員を配置して職務に当たっております。その内容についてはそれぞれのセンター長からの挨拶文で具体的な説明がありますので、そちらに譲りますが、5つのセンターが連携を取りつつ國學院大學の各学部における専門教育の土台となる教養教育、就職支援へつながる資格課程教育、そして「教職の國學院」をの伝統をさらに発展させるべく、出口としての教員職への後方支援活動等を、きめ細かく展開しているところであります。

また、令和2年度の開始から対応を迫られることとなりました新型コロナウイルス感染症の蔓延、これによって大学教育に携わるすべての教員、事務職員は未曾有の事態に翻弄されるばかりでした。しかし、ほとんど手探り状態から始まった遠隔授業も、昨年度後期からは徐々に軌道に乗り、オンラインのライブ配信授業ばかりではなく、オンデマンド方式や、ハイブリット方式なども導入されて、その多様な可能性を感じさせるまでに展開されてきました。教育開発センターにおいては、教員への遠隔授業方法の研修

の機会も設けて、本学の教育全体の質を維持する支援活動に取り組んで参りました。この状態が2年目に入るとは、予想されることではありませんでしたが、このコロナ禍が終息した際にも、遠隔授業のさらなる積極的な活用の可能性は拡大していこうと思われまます。近い将来を見据えた教育開発も重要な責務であると受け止めております。

最後に、もう1点銘記しておきたいことがございます。教育開発推進機構という組織名称からは、入学してきた学生への手厚いサポートを、担当する教員の授業改善と改革を踏まえ、その教育方法の研究を深めた上で、その成果を提供していくというイメージが強いかもしれませんが、これは、教育という大きな事業には教え方、教育方法の工夫が欠かせないという側面をそのまま体現しているものと言えましょう。しかし、教育という学生への矢印は、実は、学生からの学びという矢印があって初めて機能するものではないでしょうか。教えることと学ぶことは車の両輪のような関係にあり、教育方法のみが一人歩きしても十分な成果は望めないと思うのです。つまり、学ぶ者にとっては学習の方法という側面の開発も重要なところですが、先に紹介した「学修支援センター」はこの側面をサポートすることに特化しているところですが、これは学生一人一人の個性と向き合う、大変困難な仕事になります。その一人一人の問題に即した学びの方法について、今後の大きな課題であると考えております。

今後ともご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

教育開発センター長挨拶

石川 則夫 (文学部教授)

教育開発推進機構長としてご挨拶いたしました石川則夫です。教育開発センター長、そして教職センター長も兼任しております。どうかよろしくお願いたします。

さて、教育開発センターは、國學院大學の建学の精神の具現化を大きな目標とし、これを教育開発、本学の授業科目における専門、共通科目を通して、授業における教育力の向上へ資する方策の研究、提案を任務としております

共通教育センター長挨拶

～新「共通教育プログラム」について～

捧 剛（法学部教授）

現行の「共通教育プログラム」は、2017年度（平成29年度）に導入されましたので、昨年度の3月に、当該プログラムに基づく共通教育科目を修めた初の卒業生を送り出したこととなります。ところで、共通教育プログラムは、専門教育のようなディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーこそ持ちませんが、①汎用的なスキル、とりわけアカデミック・スキルを身につけること、②（グローバル）社会のありようを把握し、社会と自身との関係を形成すること、および③アイデンティティを確立することを主要な目的とし、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」および「主体性を保持しつつ多様な人々と協働して学ぶ態度」について、それぞれ4項目の学修成果参照基準をおいています。上記3つの目的は、専門の如何を問わず、すべての学生が修得し、または実現すべきことがらといえますが、それは、学生として学習する際にのみ必要とされるものではなく、生涯を通じて役に立つものとなります。



さて、そうした共通教育プログラムの目的をより明確に示し、かつ、より体系的に修得できるようにするために、本年度のカリキュラムから、プログラムに若干の変更が加えられています。以下、主要な変更内容を紹介することにしたと思います。まず、第1に、一部の科目群が学修目標に合わせて再編成されました。たとえば、「言語スキル科目群」が新たに設定され、そこに、これまで「汎用的スキル科目群」に属していた「英語」および「基礎日本語」と「総合科目群」におかれていた「英語」以外の外国語科目が組み入れられました。また、「基礎日本語」は、文芸的表現を磨くことなど、表現力やコミュニケーション能力の向上に特化され、これまで「基礎日本語」で教えられていた内容は、新設科目「アカデミック・リテラシーズ」へと引き継がれています。この「アカデミック・リテラシーズ」には、また、言語的な力のみならず、論理的な思考力などの涵養までも達成目標に包摂されるようになりました。他方、これまでの「汎用的スキル科目群」を構成していたその他の科目、すなわち、「数的推論」と「コンピュータと情報」は、やはり新たに設定された、「STEM系科目群」を構成することになりました。STEMは、Science、Technology、EngineeringおよびMathematicsの頭文字をとったものであり、STEM教育の推進は、もともと、アメリカで提唱

が、具体的な個々の授業においては、担当教員の専攻分野固有の目標や課題も多様であり、いわゆる教え方のスタイルやスキルについても教員の個性を踏まえた展開が期待されているところであります。つまるところ、どのような教員が、どのような研究の蓄積に基づいて、どのような授業を受講生へ提供するのかが、それこそが大学の個性であり、学外からの評価のポイントにもなっているところでしょう。もちろん、多くの教員は自らの学問的経験と研究指導の経験に立って日々の授業展開を実践しているとは思いますが、現実の教室では年々新しく変化していく学生の学びの傾向、それは義務教育から高校教育に至るまでめまぐるしく変化している教育のあり方に連動しているものであります。やはり、本学へ入学してきた学生たちの志向性も年々変化していることは明白であります。

さらに、社会のあり方、考え方から大学卒業後の人生設計の組み立て方まで変化して止まないというのが現実です。時代社会の要請という文言をよく眼にしますが、研究室と教室の往復だけでは分からないことも、実は授業を受講している学生のあり方がそれを現しているのだとも言えるでしょう。では、こうした変化に対応する教育方法の調査研究と提案が、教員各自において十全に可能であるかという、なかなかそうは行かないのが現実です。

ということで、そうしたことの支援活動として教育開発センターが置かれているということなのです。まずはFD活動支援というのが大きな柱になっています。これは新たに國學院大学の教員としてスタートする先生方、特に教育経験がまだ浅い、若手の先生方への支援活動があります。

また、シラバス作成の方法の研修も設定されています。現在の大学、短期大学においてはどこでも作成するものがありますが、ただ授業科目の予定表を明示するというだけのものではありません。学生にとっては当該授業の成績評価についての情報を得るといった側面もまた重要な事項になります。学期末の成績表が届けられた際に、なぜ、自分の評価がこうなのか、その根拠となる指標がシラバスに明記されていなければ、学生、そして保護者にも納得がいかないということにもなりかねません。シラバスは教員側にとっては授業の設計図であり、学びの到達目標を設定し、そのための学修活動全般を提案するという教育活動の基盤となるものです。

そして、成績評価方法の研修も実施しており、シラバス作成方法と合わせての参加を呼びかけております。

授業をよりよくしていくこと、それこそが学生の満足度を高め、大学自体の評価を高める作業であることをご理解いただき、教育開発センターの研修には積極的にご参加いただきますようお願い申し上げます。

された教育のモデルです。本来は、初等・中等教育におけるモデルですが、これら4領域の基礎を学ぶことは、少なくとも現在の日本にあっては、高等教育の場においても、そして、文系、理系を問わず必要なことであるといえます。また、今後ますます技術革新が進むであろう社会にあって、エビデンスに基づいて適切な情報を選択し、既成の概念を論理的かつ批判的に検証し、または革新的な提案をする力を培うために必要なものでもあるともいえます。そうした要求を満たすために、STEM系科目群には、「データ・リテラシー」と「まちづくり基礎」といった新設科目が新設されています。また、これまで「専門教養科目」の1カテゴリを構成していた「科学的思考法」や「宇宙物理学入門」といった自然科学系の科目や「國學院科目」から独立させた「論理的思考法」なども組み込まれており、複雑な事象を抽象化する力、観察された事実から仮説を立て、証拠に基づいて検証する力、日常生活におけるさまざまな議論の評価に必要とされる論理的基準と原理を学び、論証する力を養うことが目指されています。

同様に、これまで専門教養科目「法学・政治学」のカテゴリのひとつであった、「シチズンシップ科目」も独立した科目群を構成することとなりました。当該科目群には、独立にあたって、「経済と社会参加」、「情報化社会と市民」および「共存・共生の思想」が新設され、これまで必ずしも十分とはいえなかった領域がカバーされるようになっていきます。以上のように、2つのカテゴリが独立した「専門教養科目群」については、主として、人文学領域を充実させるために、これまでの「人文学」カテゴリを「日本の文学と歴史」、「アジアの歴史と文化」および「世界の文化と思想」の3カテゴリにわけて、構成する科目を増やしたほか、全体として、専門科目との接合をより明確にするために、それぞれのカテゴリとそれらに関連する全学オープン科目とを合わせたパッケージを明示し、そのパッケージ内の科目を体系的に履修し、単位修得するよう促しています。

新たな共通教育プログラムは、以上の4つの科目群に、科目群としての学習目標を明確にするために「総合科目群」から名称変更された「ライフデザイン科目群」および大学のアイデンティティでもある「國學院科目」を含めた6つの科目群から構成されていますが、どの科目群が上記3つの目的のどれを達成するためのものであるかは、厳密に設定されているわけではありません。科目群毎に、どこに重心があるかの違いはありますが、すべてが一体となって3つの目的を達成するよう設計されているのだといえます。そして、この新しい「共通教育プログラム」の円滑な運用こそが、本年度、共通教育センターに課された最大の使命とすることになります。

学修支援センター長挨拶

東海林孝一（経済学部准教授）

國學院大學教育開発推進機構は「國學院大學21世紀研究教育計画」および「國學院大學における研究教育開発推進に関する指針」に基づいて平成21年（2009年）4月に発足しました。



学修支援センターはこの教育開発推進機構の一つのセンターとして、多様な個性をもつ本学学生の学修支援と、学生生活を通じた社会人基礎力の修得促進を目的として設置されました。主な業務は1.学修支援に関わる調査・研究、2.修学相談、3.リメディアル教育の開発・運用、4.修学指導に関わる教職員への助言、5.障がい学生等の学修支援および学修支援センター内にボランティアステーションを設置してボランティア及び学内ワークスタディの運用を行っております。

学修支援センターが設置されて以来、特に障がい学生等の学修支援は学内外ともに大きく変わりました。障がい者を支援に関する日本国内での法的枠組みは、平成18年（2006年）の国連での障害者権利条約の採択から大きく変わり始めました。平成23年（2011年）には障害者基本法が改正され、平成26年（2014年）に障害者権利条約を批准、平成28年（2016年）には障害者差別解消法が施行されました。

障害者差別解消法は、障害者に対して不当な差別的取り扱いの禁止（公的機関、民間事業者ともに禁止）と合理的配慮の提供（公的機関は義務、民間事業者は努力義務）を求めるものであり、平成令和3年5月には、民間事業者においても合理的配慮の提供を義務化する改正が行われました。

以前は、障がい者が社会的な生活を行ううえでの障壁を障がい者本人および家族の努力によって取り除くことが前提になっていましたが、障害者差別解消法制定以降は社会に障がいを取り除く義務が課される事になりました。これは障がい者支援のパラダイムシフトと言えるでしょう。

國學院大學はこのような法的枠組みの整備に伴って、建学の精神および「障がい学生支援に関する基本方針」のもと、平成31年（2019年）4月に「障がい学生支援に関するガイドライン」を施行しました。このガイドラインによって、國學院大學は障害者差別解消法に基づく「合理的配慮」の提供と、それに加えて、障がい学生には該当しないながらも、病気やケガその他で学修において何らかの支援を必要とする学生に対する「教育的支援」を行っております。渋谷4学部は学修支援センター、人間開発学部はたまプラザ事務課、大学院は大学院事務課が相談窓口となり、教務

課、学生生活課、キャリアサポート課、入学課などの関連部署との調整は学修支援センターが行うこととなりました。

さらに令和3年度からは、障がい学生の支援を行っているきた学内ワークスタディの「ノートテイク」の皆さんを、「学生サポーター」として再組織化し、教職員とともに支援を行っています。

新型コロナウイルスの感染拡大によるオンデマンド授業は障がい学生支援にも影響を与え、オンデマンド授業教材の字幕作成、教室外からのノートテイク支援など、今までにない支援方法も取り入れています。同時にオンデマンド授業によって、いつでも、何回でも授業を再視聴できるプラスの影響も活かしていきたいと考えております。

障がいは、人によって症状が異なるため支援のあり方も異なります。また障がい者でなくても、学修上の悩みや困りごとを抱えている学生はいます。全ての学生に、「学修支援センターで相談して良かった」と言ってもらえるような学修支援センターでありたいと思っております。そのためにも、全ての教職員ならびにともに学ぶ学生の皆さんのご理解ご協力が必要です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

英語教育センター長挨拶

久保田正人（教育開発推進機構教授）

本学の英語教育は数年にわたる実態調査にもとづいて改訂され、本年度の1年生から新しいカリキュラムで運営されています。新カリキュラムの特徴を一言でいえば、学生個々人の英語の学力と関心に応じて受講する科目を選ぶことができるというものです。このようなカリキュラムを実行するには、科目の種類を増やし、卒業要件単位の充足の仕方などを根本的に変えなければならないなど、かなり大がかりな改定が必要でした。なぜカリキュラムを変えなければならないか、その背景全般についてご興味のある方は、久保田正人・土肥充「國學院大学の英語教育」（『教育開発ニュース』vo.21, 2020）をご覧くださいければと思います。

さて、自己紹介させていただきます。わたくしの専門は英語学（English linguistics）です。英語学というのは、英語を対象とした言語学です。言葉の使い方には人一倍関心を持っていますが、最近、思うところがあったので、それについて記し、自己紹介を兼ねたいと思います。

質問の流儀

「良い答えを得たければ良い質問をせよ」といわれます。まったくそのとおりです。が、「良い質問」とはどのような質問でしょう。わたくしが「良い質問」だと評価するの

は、聞きたいことが明確で、かつ答える側にとっても適切な回答を探し出すことができる、そんな質問だと思っています。聞く側が何を聞きたいのかははっきりせず、答える側に無限に広い範囲から答えを探し求めさせるような質問は、質問として失格です。

例えば、相手の性格を知りたいと思い、「あなたはどんな人が好きですか」と問うたとします。何でもない質問のように聞こえますが、この質問は間口が広すぎて、答える側はおびたしい数の個別の性格を挙げ続ける以外に答えようがありません。それに対して、「あなたはどんな人が嫌いですか」という質問はどうでしょうか。おそらくピンポイントで「××な人」という答えが返ってくるのではないでしょうか。以前、知人の娘さんに縁談話が持ち上がったとき、娘さんは「電車で週刊誌を読む人はいやです」と答えたそうです。仲介した人は娘さんの性格をもののみごとに描き出す良い質問をしたわけですね。

質問の落とし穴

良い意味でも悪い意味でも、質問は答えを束縛します。そのおもしろい例が『徒然草』にあります。

学問自慢の医師篤成（あつしげ）に、六条有房公が問いました。『しほ』の漢字という文字（もんじ）はいずれの偏にか侍らん。すると篤成は迷うことなく「土偏（どへん）に候ふ」と答えました。「しほ」の漢字には鹽と塩があり、土偏の「塩」は俗字で、当時、俗字を使ったりすると人間の箔が落ちたそうです。この答えを聞いて有房公は「そなたの学問も底が知れた。あとは聞くに及ばぬ」と言われ、一座大笑いになって、篤成は面目を失って退出した、というのです。

国文学者の玉井幸助氏は、この箇所について、「これはあつしげの鼻柱を挫いてやろうと思はれた有房公が、俗字の塩を聯想させる為にわざと「何偏か」と問うてあつしげを罠にかけたのであります」（『言葉と文』、開拓社、122頁）と解説しています。

これを英語学風に言い換えれば、wh疑問文はwh語を除いた残りの部分の内容が事実として前提になっているという性質を利用したものといえます。『しほ』という文字は何偏か」というwh疑問文は『しほ』という文字には偏がある」という前提で発話されています。己の学識の高さを披露したい篤成は、有房公の仕掛けた罠にひっかかって、ひたすら偏のある「しほ」を思い浮かべ、質問の前提に沿わない偏のない正字など、もう意識中にはなかったのです。質問は答えを束縛するのです。

思考停止の質問

答えに引き継がれるのは問いの「前提」だけではありません。問いの「間口」も引き継がれます。例えば、最近テレビなどで「あなたにとって〇〇とは何ですか」という質問を耳にします。このような質問は、過度に抽象的で、まっ



たく具体性がありません。間口が広すぎるのです。この種の質問になまじ答えようとするれば、「人生そのものです」といったような、これまた過度に抽象的でほとんど無内容な回答しか期待できないでしょう。インタビュアーは気の利いた質問をしているつもりなのかもしれませんが、視聴者は、その道の達人から「極意」を聞きたいのです。それを聞き出すのが役目であるインタビュアーが無内容な回答しか引き出せないとしたら、それは質問自体が無内容だからです。こういう「思考停止の質問」は、インタビューする側の準備不足と問題意識の欠如とを露呈するだけです。

良い質問とは

ここで「良い回答を得たければ良い質問をせよ」という言葉に戻ってみましょう。この言葉の内容を英語で表現することは存外むずかしいように思います。A good question leads to a good answer. と英作文してみても、どうも落ち着きません。なぜならa good questionは「良い質問」という意で用いられるよりも、むしろ、「答えに窮する質問」という意で用いられるのが通例だからです。ドラマなどで、何かを聞かれて、“That’s a good question.”と返答した登場人物は、たいていが困った顔をしています。

この言葉は、指差す方向という点からすれば、A question well stated is a question half answered. (良い質問をすれば半分答えが出たも同然) というくらいかと思われまします。ここでいうwell statedは、「明快」(clear)で、「正確」(precise)で、「論点が絞込まれており」(specific)、「紛れがない」(explicit)ということです。良い質問は、その人の知性の高さを示すのみならず、問われた人にとっても大きな前進をうながします。

反省を込めて

わたくしは40年あまり大学の教師をしています。たまに講義がうまくゆくとひとり悦に入ると、「質問はありませんか」と学生に問いかけていました。しかし、これはじつは安易な問いかけであったことに気づきました。この問いかけには、学生に「良い質問」を誘発する創意工夫がありません。学生に一步前進をうながす問いかけにはなっていないのです。質問する側も答える側も真剣勝負のような、そんな講義ができるように、残り少ない教師生活のなかで努めたいと思っています。

教職センター長挨拶

石川 則夫 (文学部教授)

本学の特徴を一言で表現するのが「教職の國學院」という言葉であり、國學院大學の研究・教育が長年にわたって力を注いできたところであり、また、我が国の教育界にお

ける伝統的な評価ともなってきたところでもあります。入学してきた学生諸君にはことあるごとにお話しますが、大学入学までのどこかで必ず國學院出身の教員に教わってきたはずである、諸君はその先生方の後輩になるのであり、先輩が後輩に教え、後輩が先輩を見て学ぶのが本学の伝統であると。しかし、こうした学脈が継続していることに依存しているだけでは将来、未来へ向けての教員像を強く発信していくことは難しい時代です。より多くの情報を集約し、教職志望者への適切な提供、教員採用試験への各種対策講座の開設、そして採用試験合格を目指す学生への奨学金助成など、手厚いバックアップ態勢を担うことが教職センターの責務となっております。

また、教職センターは全学的な教員養成に責任を持ち、渋谷キャンパスにおいては開放制教員養成制度のもとに中等教育の教員養成の運営支援を行い、たまプラーザキャンパスでは、教育系学部・学科として初等教育・中等教育及び幼稚園、保育所・認定こども園関係の教員・保育士養成の運営支援へも連携を取りつつ、教職への就職を目指す学生の手助けをしております。また、たまプラーザキャンパスでは、教育系学部・学科としての学生支援活動を重視し、人間開発学部において教育実践総合センターを設置しております。

ところで、昨今は教職志望者数の低下が取り沙汰されているところです。いわゆる働き方改革のもっとも重要な部署として、学校という職域で教育職に従事している教職員の労働実態が話題になり、我が国の教育制度自体の改変、改革を伴う施策が待ち望まれていることは、教育現場で日々奮闘しているすべての教員の願うところでしょう。たしかに教育現場には困難な状況が山積しているでしょうが、しかし、教職とは一昔前の「聖職」とまでは言わないにしても、個性を持って生まれてくる人間という種の、自ら成長しようという潜在的な能力を、発見し、見守り、自ら育ていこうとする力を伸ばす手助けをする。つまり、人間の成長過程の重要な時期に大きく関わる仕事なのです。これはもちろんありきたりのマニュアルや、数年間に蓄積した知識程度ではとても携わることが出来ない、非常に難しい仕事です。いわば、教員としてではなく、ひとりの人間としての力が試される場ということでしょう。たとえば教育実習ではそうした現場を肌で知る貴重な機会と言えるわけですが、仮に実習で失敗し、教職への気持ちが揺らいでしまっても、教職センターの教職員は全力を尽くしてサポートし、もう一度教職の素晴らしさに気づき、その種を大きく育てようとする学生諸君を応援していきます。

「教職の國學院」を担う一人一人を支えていく、教職センターへのご理解、ご協力をよろしく申し上げます。

令和2年度 コロナ下における 教職センターの取り組み

坂入 裕一 教職センター（教育開発推進機構事務課教職担当）課長

教職センターの令和2年度事業の内、新型コロナウイルス感染防止に対する対応は次のとおりであった。

教育実習に関する対応

文部科学省からの事務連絡「令和2年度における教育実習の実施に当たっての留意事項について」（令和2年4月3日付）ならびに、通知「令和2年度における教育実習の実施期間の弾力化について」（令和2年5月1日付）では、期間設定の柔軟化や「秋以降にすることの検討」等の内容が示された。実習先の各校では実習実施に関して、3週間から2週間への短縮や、例年5月から7月までの時期に多くが行われているところ、今回は秋に変更する、などの方向で検討がなされることになり、本学含め各大学にその方針を通知した。当センターでもこれらの通知を受けて時期の変更や短縮への対応を行った。

また、教職センター委員会では、実習自体が中止となった際の措置についての検討も行った。すでに実習中止となった2名の学生に対しては、國學院高等学校に要請し、受け入れていただく回答を得た。後期履修確定後に、急遽、実習が中止になった学生への対応としては、「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令」（令和2年8月11日付）で、必修ではない教職専門科目を学修し教育実習の単位とすることを認めていることから、該当する科目について、実習中止となった時点で遡って受講が可能な授業（動画配信などで）の履修を認めることについて、教職センター委員会で承認し、教務部委員会でも審議・承認を得た。なお、この対応が必要になった学生は結果として出なかった。実習期間が短縮になった学生は最終的に26名を数え、補習課題の提出、模擬授業会（1月30日実施）により代替を行った。

介護等体験に関する対応

文部科学省からの事務連絡「令和2年度における介護等体験の実施に当たっての留意事項について」（令和2年4月3日付）では、教育実習と同様に実施時期を秋以降にすることへの検討や卒業年次生など体験を次年度に実施することができない等、事情のある学生を優先する等の内容が示された。続いて「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の

特例等に関する法律施行の一部を改正する省令等の施行について」（令和2年8月11日付）が通知され、介護等体験の年度内限りの特例的な措置として、体験の代替措置が定められた。当センターでは、後期に至っても多くの学生が受入先の決定がみられない状況を見て、省令の定めるいくつかの代替措置の内、（独）国立特別支援教育総合研究所が開設する、免許法認定通信教育の科目に係る印刷教材の学修の成果を確認する措置を採用、文部科学省へ必要な申請を行い、10月28日に対象者に対してガイダンスを実施、次年度の体験を希望する学生を除く学生に対して「印刷教材の学修とレポート提出」の対応を行った。代替措置により対応した学生は137名、体験が成立した学生は32名であり、修了者の合計は169名であった。

また、介護等体験については、事前指導として体験前年に3回のガイダンスを実施し、体験年に3回のガイダンスと直前ガイダンスを実施する流れとしている。昨年度については、体験前年のガイダンスは、1回目を12月に実施し、2回目と3回目のガイダンスは合わせた形で年度明けの4月に行った。体験年のガイダンスについては、3回を1回に集約し、7月29日に実施、直前ガイダンスについては予定通り実施したが、多くの学生は前述の10月のガイダンス以降、代替措置に移行することとなった。

実習等に伴う「健康診断書」提出に関する対応

例年4月に実施している「学生定期健康診断」は、感染リスクを回避する観点から8月から9月までに実施することとなった。このことに伴い、「学生定期健康診断」前に教育実習や介護等体験において、体験先に診断書提出を求められた学生は、医療機関において自費により健康診断を受診する必要があることとなった。以上の状況に対し、6月9日に開催された國學院大學危機対策本部において、健康診断費用の助成が決定され、当センターが取り纏め部署に指名された。助成額は各自が受診した医療機関が発行する領収書に基づいた金額となり、その後、関係部署である、たまプラーザ事務課、学生生活課、保健室、経理課と情報を共有、「診断書」発行開始日に間に合わない学生に対して必要な措置を進めた。

教職就業支援に関する対応

ガイダンスの開催については、年度の前期中はすべて中止し、必要最小限の情報発信をメールで行った。また、支援企画の開催についても中止や後期集中型に変更する等絞り込み、採用試験を控えた4年生対象の教員採用試験対策会の実施のみとした。内4月の「直前集中講習会」については、内容を出願書類の指導に限定し、電話やメール等の通信手段を使って実施。5、6月の一次試験対策については、態勢が整ったためオンラインを中心に実施。7、8月の二次試験対策については、感染対策を徹底し、密を避けるため受講生を2班に分け、片方は対面、もう片方はオンラインの形で交互に実施した。対面においてはさらに受講生に時間を指定し時間差での指導を一部取り入れた。

自治体の側でも採用試験の内容を変更するケースが目立った。関東ブロックだけでみても、千葉県1次の集団面接、神奈川県1次の論作文や2次の模擬授業、横浜市1次の論作文は中止となった。川崎市では1次の集団討論を集団面接へ変更し、2次の場面指導を中止とした。また英語科に課される実技については、ほとんどの自治体で中止となった。

年度の後期は、夏期休暇期間中の9月に行った3年生対象の「夏期集中講習会」を含めて、前期に中止した3年生に対する支援を中心に、例年行っている支援内容が不足することのないよう、オンラインを駆使し日曜日を除くほぼ毎日実施した。例年3月上旬に実施している学外施設での宿泊を伴う「教職合宿」については、学内で代替講習を行った。

教員免許状更新講習に関する対応

文部科学省からの事務連絡「新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた教員免許更新制に係る手続等の留意事項について」(令和2年6月5日付)では、感染症の対応による幼小中高教員の業務量の増大等により更新講習課程の修了が困難であるとの認識の下、修了確認期限又は免許の有効期間の延長を認める旨の内容が示された。これが後押しとなり、本学でも例年どおりの実施は困難との判断を下し、申込受付終了後であったが受講者に対して、お詫びとともに令和3年度に優先受付する旨を示し返金手続きを行った。令和3年度の講習については、講習定員数を増加する形で文部科

学省に申請した。

その他の対応と今年度の状況

当センターが事務局を務めている「院友東京都立高等学校部会」、当センターが主催している「院友教員講演会」「院友若手教員交流会」、院友教員等私立学校の協力教員を講師に実施している「私立学校教員就職対策会」といった、院友教員の協力や一堂に集めての会については、感染リスク回避や院友教員が感染症対策などにより例年になく多忙であるとの情報が入ったため、実施を見送ることとした。

続いて、今年度の状況については次のとおりである。

「教育実習」「介護等体験」については、文部科学省からの通知「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行について」ならびに、「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律施行規則の一部を改正する省令等の施行について」(共に令和3年4月3日付)において、感染症への対応として令和2年度と同様の対応を可能とする旨が示された。これらの通知を受け、当センターでは状況の変化について情報収集を行いながら引き続き対応に当たっているが、とりわけ大きな事象は発生しておらず順調に進んでいる(7月14日現在)。「教職就業支援」についても、ガイダンス、支援企画共にオンラインでの実施を中心として例年どおりに実施。「教員免許更新講習」についても予定通り実施する方向で、8月16日(月)の開講に向けて準備が進んでいる。院友が関係する行事や企画については、すでに中止を決めたものもあるが、今後予定しているものについては、実施が可能な状態に至るどうか窺っているところである。



オンライン授業2年目を迎えて

—もう一度学生に聞いてみました—

昨年度、新型コロナウイルス感染症への対応に伴い、突然始まったオンライン授業。今年度は少人数の授業では対面授業を復活し、オンライン授業と並行して実施しています。前号（Vol.23）では一年生（当時）にインタビューを実施しましたが、今回は、学年・学部を広げてインタビューをするべく、本学の障がい学生支援の一翼を担う学生サポーターのメンバーから4人の協力を得ました。この4人には、昨年度のことも振り返りながら、準備・受講する中で考えたこと、オンライン授業を経験してから対面授業を受けた時に改めて感じたこと等、今考えていることを率直にお話してもらいました。

【インタビュー参加者】 ※学年は今年7月時点のものです。

- (日・2) 文学部日本文学科2年生
- (外・3) 文学部外国語文化学科3年生
- (経・3) 経済学部経済学科3年生
- (法・4) 法学部法律学科政治学専攻4年生
- 聞き手 教育開発推進機構 鈴木崇義・小濱 歩

1 昨年度4月に、オンライン授業に切り替わると聞いて、どう感じましたか。また、何か準備をしましたか。

(日・2) 私は高校の卒業式もきちんとできなかった流れで入学して来たときだったので、やっぱりという気持ちでした。いつまで続くか不安な一方、「数ヶ月で治まるのでは」というふうにも考えていました。準備段階ではTwitterで友達を募りました。教室だと隣の人と話す機会もあるかもしれませんが、オンラインだと難しいと思ったからです。本名は使わず、所属クラス名だけ出して「同じクラスの人、宜しくお願いします」みたいな感じで連絡を取り合うようにして、授業でZOOMから落ちてしまった時に先生に声をかけてもらうよう頼むとか、そういうやりとりもできました。

(経・3) 私は学費のことが一番気がかりでした。奨学金を借りているのですが、通えなくなった場合お金はどうなるんだろうというのが、率直に言ってすごく不安でした。しかも、私は新型コロナが流行り始めたくらいのときに、海外に行っていたんですね。帰ってくるとこうい

う状況になっていて、自分自身のお金もなくて。それが本当に不安でした。

(外・3) 私の場合、一応、自宅に自分のパソコンとネット環境があったのですが、それで本当に受講可能かどうか不安でした。他大学に行った高校の友達で、早くにオンライン授業が始まっている子がいたので、どんな感じが尋ねたり、ネットが得意な友達にZOOMの使い方を訊いたりしました。大学から送られてきたマニュアルを見ながらやっても同じ画面にならなくて、相談しようとしても窓口がよくわからなかったのです。もう友達に訊くしかないなと思って。

— マニュアルよりも、友達との情報交換の方が頼りになったのですね。学校の外に味方がいると心強いんですね。

(法・4) 私も4月の頭まで留学していました。ヨーロッパでも、学校を閉めますとか、仕事行かないでくださいとか、ロックダウンになったりしたので、オンライン授業については「まあ、そうなっちゃうよな」という感覚ではありました。ちょっと困ったのは、授業を受ける場所ですね。白い壁の部屋がなくて、カメラをオンにするると自分のプライバシーが映ってしまうのはちょっと嫌だな、というのは感じました。

— カメラのオン・オフの問題は結構デリケートで、先生方も「出してください」とはなかなか言いづらいのですね。最近はバーチャル背景などの機能も充実してきましたけれども、どのようにプライバシーを守っていく

か、また、カメラ等の使用に関してどのような配慮が必要かということなど、今も模索が続いている状況だと思います。

(日・2) 補足になりますが、私も奨学金を高校から申し込んで、大学で手続きする形だったのですけれども、説明会がなくて。書類だけ届いて「手続きしてください」という感じだったので、奨学金を受取るまですごく時間がかかりました。そんなふうに、よくわからないまま手探りで色んな手続きをしたのが、とても大変だった記憶があります。履修登録の時も、『履修要綱』だけ読みながら、まるでゲームの攻略本を解読している気分です。

—— 大事なことをありがとう。そうだったんですね。大学の事務的にも大変な状況の中で、学生さんに負担がかかってしまうようなことも少なからずあったのですね。Twitterで友達と助け合ったという話もありましたが、サークル活動など、学生さん同士の交流という面は、どうでしたか。

(法・4) サークル代表をしていますが、新歓活動ができない状況だったため、Twitterで色んな人にフォローを飛ばして、自分のサークルを知ってもらおうと苦労しました。

(経・3) 私はFA（※経済学部のアクティブラーニング授業をサポートする学生）をしていたので、同期に加えてクラスで20人くらいの一年生と話したりはしていました。先生からも「新生をフォローしてあげてほしい」と言われていましたから、「授業外で時間のあるときにZOOMで交流しませんか」と声をかけるとかなりの人が参加してくれて、雑談したり、軽くゲームをしたり。今でも結構仲良くしているみたいで、嬉しいです。

(法・4) うちのサークルでは、もともと現メンバーでの集まりのようなことを定期的にしていましたし、数人だけではありますけれども、入りたいと来てくれた人もいたので、何とかなっていたのかなという感じです。

(経・3) 私が入学した時って、入学して何日間かは本当にサークルの勧誘とかすごく。束のようにチラシをもらったりして、体験入部もできたんですよ。私は色々試してみた上で、結局は入らなかったんですけども、今の二年生の人たちはそういうのがなかったんだなって。

(日・2) 今は、ある研究会に入っているんですけども、最初はその存在自体知らなかったんです。たまたま教わりたかった先生にメールしたとき、「私の授業を受けられなくても、研究会があるから参加してみても」と、10月くらいに紹介していただいた感じです。それまで、その研究会の存在を知らなかったことがすごくショックで。最初の頃に、もっとそういう情報があればよかったな、というのがあります。

2

オンライン授業になって、勉強する上で苦勞したこと、工夫したことはどんなことでしょうか。

(日・2) ライブ型の授業の場合、先生との距離が、意外と対面より近くなるのかなと思いました。チャットとかも送りやすかったので。成績評価のことなど不安もありましたが、「とにかく積極性が大事だろう」と思って、先生にたくさん質問を送っていました。コミュニケーションを取りたくて、人との繋がりがほしくて、というのもありました。資料が配布されて、課題を出すだけの授業というのもあるって、そういう、先生の顔が見えない授業だと、やっぱり苦しかったです。

—— 積極的に質問していくというのはとてもよいですね。では、オンライン授業の受け方というのは、その授業に関しては、比較的スツと入れた感じなのでしょうか。

(日・2) 無我夢中というか、「やるしかない」という感じで。大学がどういうものかわかっていないので、普通に受け入れていた感があったかもしれないです。

—— なるほど。逆に、苦勞した授業などはありましたか。

(経・3) 私は少し違って、オンラインだと質問がとてもしづらかったんです。チャットを送るタイミングも難しく。対面授業のときには、終わったあと先生に話しかけに行くことが多かったんですね。特に、私の所属する経済学部には外部の方が講演して下さる授業があるのですが、対面授業だったときには海外インターンシップをやっている方のお話をうかがって、そこで私「行きたいです」と言って、海外に行くチャンスをいただきました。そういう機会が減っちゃったなと感じます。昨年度も、そういう授業がオンラインであって、質問したかったのですけれども、うまく声をかけられなくて、結局できずに終わっちゃったので、やっぱり対面のほうがいいなあ、と思いましたね。

—— 確かに、直接声をかけやすいというのは、対面ならではのメリットですね。ZOOMだと、まごまごしている内に退室しちゃったりしますし、タイミングが難しいですね。

(外・3) 語学の授業だと、特にネイティブの先生方とのやりとりでどうしても聞き取りづらかったり伝わりづらかったりして、授業を受けるのが苦しくなることもありました。最初はそれでも、少しずつコメントが返ってきて、頑張ろうと思えていたのですが、途中からそれも途絶えてしまって。レスポンスがないと、やっぱりモチベーションも保ちづらいです。

(法・4) 苦勞ということで一番大きかったのは、課題で

すね。「課題の提出をもって、毎回の出席を認定します」という授業がどっと出て来て、課題がどんどん溜まってくるんです。あれはきつかった。あと、先生によって授業のやり方が全く違って、たとえばライブ授業なのに一方的にしゃべって終わりとか、あるいはほとんどレジメを朗読するだけというのもある。それはどうなんだろうと。せっかくZOOMという双方向のコミュニケーションが取れるツールを使っているのに、それだったらオンデマンドでいいんじゃないの、とか思ったりすることもありました。

— コミュニケーションを取りたい、という思いはみんな強いんですね。それから、オンラインに切り替わって課題の多さに泣いた、という学生さんは確かに多いですね。先生のほうも、毎回すごい量を添削しないといけないし。

(経・3) 課題と言えば、私のゼミでは先生が「レポートを毎回添削して返すのは大変だし、今回はプレゼンの評価なので、ビデオを作りなさい」と仰って。学生が自分のプレゼンの録画を先生に送って、それを見て採点されるらしいです。

— らしいですって、これからやるの!? たくさん動画を見なくちゃいけないから、それはそれで大変そうですね。

(経・3) はい。先生、ちょっと疲れちゃって、文字を読みたくないって(一同笑い)。

— でも、プレゼンは動画で評価したほうが、という考え方も確かにわかりますね。面白いです。先生の側も色々工夫をされているんですね。

3 昨年度後期～今年度は、対面授業とオンライン授業が並行して行われていますが、これについてはどう思いますか。昨年度との違いも含めて教えてください。

(日・2) 昨年度後期に一部科目で対面授業が始まりましたが、私が登録した科目は全部、ハイブリッドも含め対象外で、引き続きずっと遠隔で受けていました。でも、Twitterとかでハイブリッド授業を受けている人が「めんどくさい、行かない」とか書いているのを見たとき、「私はこんな思いをしているのに、対面授業に参加できている人が、なんでこんな文句を言っているんだろう」とすごい思って。せめて私だって、一回でも対面授業を受けることができれば同じように比べることもできるのに、私は行かせてもらえていないのに文句だけ聞かされては……と思って。そういうこともあって、今年に

なって対面授業を受けられるようになったときは、本当に嬉しかったです。ただ、去年より取っている授業が増えたせいもありますが、対面とオンラインの並行というのは課題がとにかくたまりやすくて、私は通学時間もかなりかかりますし、その分、課題をする時間が限られていて、今度はそちらで追い詰められています。今も、期末課題が本当にやばい感じです。でも、去年一年のことを思えば、嬉しい悲鳴かなとは思っています。

— ありがとうございます。それはつらかったね。あと、対面とオンラインの並行というのは、通学のことを考えると困難もあるということですね。そうかといってオンラインだけだとつらいですし……たとえば、コロナが終わったとして、オンライン授業も引き続き活かすすれば、どういうふうにすればいいのでしょうか。

(日・2) 基本、対面がいいとは思いますが、オンラインで良かったのは、たまプラーザキャンパスの授業が取れたことです。渋谷→たまプラーザ→渋谷、という取り方をしても、全て自宅受講できました。対面授業に戻っても、別キャンパスの授業をZOOMで受講できるというのは「あり」かな、と思います。

— キャンパスが違って受けられるのはオンラインの強みですね。海外の先生の授業を受けて、海外の学生と議論するというようなことも出てくるでしょうね。

(経・3) 私、現時点では、対面で受講できるのはゼミだけという状況です。経済学部は基本的にほとんどの授業が50名以上なので、そもそも対面が厳しいです。また、担当の先生はパソコンが得意なので、ZOOMでも難なく授業運営ができてしまうんですね。だから、オンラインで授業は十分できている状況です。ただ、私はさっきも言ったように、対面のほうがいいなと思っていて。というのも、ゼミがZOOMになったときに、やっぱりモチベーションが全然上がりませんでした。それと、その頃は図書館も使えなかったの、文献が全然読めなかったんです。やっぱり図書館で本は選びたいし、卒論のテーマを決めるためにも——今は決まっていますけれども——とにかく図書館に行きたかった。先生とも、どういことをやりたいか、ちゃんと話をしたかったので、そういうのができるようになったということは、対面に戻って本当によかったなと思います。

— 昨年度、特に前期は図書館が使えない時期もあって、それは本当にキツかったと思います。あとはやっぱり、直接相談できるというのは、対面の強みですね。

(外・3) オンラインと対面の並行が大変というお話がありました。特に両者が時間割で交互に入っていたりす

ると、パソコンを大学に持って行って、大学で受講しないといけないのが大変です。ただ、慣れてしまえば、サイクルは作れるのかな、とも思います。そんなにネガティブに考えないようにして、一・二週やれば、「ここにこの授業があるから、この課題をここでやれば、これはこの時間で終わるな」というような感覚が何となくつかめてきます。すると、自分のペースを作りながらやって行けるので。「オンラインでできたんだったら、並行でも絶対できる」と考えて、「できない」とは思わないようにしました。同じように一・二週で感覚をつかむと、「この日はここが空いているから、予定を入れよう」というようなこともできるようになってきました。もちろん、完全とは言いがたいですけども、「できてるっぽいね」と自分で思えるようになっていくと、気持ちも軽くなるし、次につながるかなって。

— う〜ん、なるほど……。いや、ありがとうございます、参考になりました（一同笑い）。

(法・4) 私は対面の方がモチベーションを維持しやすいので、なるべく大学や他の場所で受講したり、作業したりしたかったです。でも感染症対策がありますから、飲食店とか長居するわけには行きませんし、地元の図書館も一時間までと制限があったりして。対面授業が入っていれば、大学に来て勉強できるのですけれども。現在4年生で、授業を二つしかとってなくて、就活などイレギュラーなことも入ってきて、なかなかうまくサイクルが作れない。対面のほうが生活リズムも保ちやすいし、オンラインだけだと心の健康が脅かされるような……。そういうことを考えると、対面のほうがありがたいです。

— 集中できる環境は人によって違いますね。それに、オンライン、特にオンデマンド授業は、受講生が自己管理できないと、置いてきぼりになりがちと言う話も聞きます。

(経・3) 経済学部のある授業は、ZOOMのライブ授業ですが、あとで録画のURLを送ってくれるので、実質的にはオンデマンドみたいになっています。課題の提出期日も少し先に設定してくれて、結構学生に優しいのかなと思います。

— なるほど。課題の提出期間はどのくらいでしたか。

(経・3) 去年は「授業が終わった1時間後」というのがありました。

(日・2) 次の授業の前日というのが多かったですね。先生によっては三日とか四日とかという人もいました。

(外・3) 私の場合、一週間ということもありましたし、

当日授業終了後というのもありました。ちゃんと参加していることを確認しますということかな、と。

4 昨年度から今年度の期間の授業で「いいなあ」と思った授業、よく工夫された授業はありましたか。

(日・2) 私は、基本的に先生の顔が見える授業がいいと思っていて。去年前期に受けていたある授業は、資料のPDFと講義の音声を配信する方式でしたが、資料の中に「31：56からこの話をしています」みたいな注記を入れてくださって、おかげで復習がしやすかったです。また、「メールでいくらでも質問していいよ」といってくださったので、自分の興味のあることで、授業とは全く関係ないところで質問をしても、全部答えてくださいましたし、授業内で説明もしてくれたので「楽しいな、この授業」と思いました。あとは、今年オンラインで受けている授業で、実際に兜とか鞍とかをカメラの前にかざして見せてくださる先生もいました。対面授業だったら、教室の後ろのほうから、遠目に見なければいけないけど、オンラインだと間近に見られるので、「楽しいな、いいな」と思いました。

(経・3) 私のゼミの先生は、オンライン授業でも対面と同じように、90分間みっちりやるんです。授業資料もいちいち配らないので、画面を見ながら集中して聴いて、ノートもその場で取らないとついていけないという、ちゃんと授業を受けている気にくださるというか。カメラをオンにして顔も映すようにしないといけない。他の授業だと「顔を出さなくていい」といってくれる先生もいますけれども、そうなる結構自由じゃないですか。大きい声では言えないけれども、ご飯とか食べながら受けてたりして（一同笑い）。そう考えると、オンラインでも、本当にみっちり90分やってくれるほうが、ちゃんと身になっているな、という実感が持てたし、課題をやるときも、ちゃんと頭に入っているのが楽なんですよ。それがよかったなと思いました。

(外・3) レスポンスがあるといいなと思います。たとえば課題をやってみて、「何かが違うんだろうな」と思っても、「何が違うのかわからない」ということがあったりします。すると、先生から「もっとこうしたらいいですよ」というような感じでレスポンスが返ってきて、「ああ、こういうことだったんだ」と理解して、それがもっと頑張ってみようかなという意欲に繋がったりします。あと、私はテストよりもレポートのほうが好きで。多少課題が溜まることもありますが、そんなに多くはなかったですし、活字を読むのが好きなので、調べるのもそんなに苦ではなく、書くのも好きなので、いっぱい書けるというのはよかったです。

今後、感染症が終息したとして、それでもやっぱりオンライン授業はあったほうが良いと思いますか。

- (日・2) 別キャンパスの授業を受けたいときは、オンライン授業があるといいかなと思います。あと、今年、二年生以上が対象の授業を受けるようになって気づいたのは、「就職活動で授業を受けられない人は、あとで視聴して、メールで課題を出してもいいですよ」という先生が多いことです。自分が将来就活するときのことを考えると、そういうフォローをしてもらえるとありがたいなと思ったので、三・四年次の授業については、オンデマンドでも受講できる授業があるといいなと思いました。
- (経・3) 私は先ほどから「対面がいい」と言ってきましたが、実はオンラインの恩恵も結構受けています。去年の後期くらいから資格の勉強を始めたのですが、オンデマンド授業だと受講のタイミングを調整できますから、比較的まとまった時間を確保できたのはとても良かったです。あと去年の後期に親知らずを抜いたので、オンラインだったからこそ通院の時間が自由に取れたというのが（一同笑い）、本当によかったと思います。ただ、ちょっと懸念するのは、仮に大学でオンライン授業が普通になって、こうした受講スタイルが定着してしまった場合、一度それに馴染んだ学生が社会に出たときに、そこでの働き方にうまく接続していくことが難しくなる可能性もあるかな、と。
- (外・3) 通院の話がありましたけれども、病気は、自分の体調管理だけではどうしようもない部分もあって、対

策をしてもかかる人はかかってしまいます。やむを得ない事情で直接受講できない人をフォローできる点では、オンラインという選択肢もあってよいと思います。

- (法・4) 別キャンパスの授業を受けられるのは、私も魅力的だと思います。また、授業で資料を見せるときに、スライドよりも画面共有のほうが、近い距離で細部までじっくり見られて、そこはオンラインの利点かなと思いました。私は対面のほうが良いと言いましたが、今回の集まりで皆さんのお話を聞いていて、オンラインの良さも実感できたので、やっぱり、学生自身がどちらで受講したいか選択できるのであれば一番いいのかなと。その意味では、理想としては、全ての授業がハイブリッド形式というのがいいのかなと思いました。これが「絶対にオンラインでなくちゃだめ」ということになると、私みたいな学生はやる気がなくなってしまうたり、「何のために大学に入ったんだろう、これだったら通信教育でいいじゃないか」という気持ちになってしまうりするのではないかなと思うんですね。だから、やっぱり自由度があったほうが良いと思います。

—— 世の中全体で、オンラインの活用を含めた今後の大学の授業のあり方を考えた方がよいのかもしれないね。ちょうどお時間が来ました。これで今回のインタビューを終えたいと思います。忙しい中、率直なお話を聞かせてくれてとても感謝しています。どうもありがとうございました。

(一同) ありがとうございます。



「令和3年度に向けた 遠隔授業研修会」実施報告

新型コロナウイルス感染症の収束が見込まれず、令和3年度も遠隔授業が続行されることになりました。本学では受講者数や授業の内容に応じて、対面、遠隔（ライブ配信・オンデマンド）、ハイブリッド型（対面とライブ配信の同時進行）のいずれかの方法で運営することになりました。一年を経て遠隔授業には慣れたという教員もいれば、これから初めて遠隔授業を実施する教員や、ライブ配信授業は体験したけれどもオンデマンド授業は未経験という教員もいます。

そのような状況下で、教務部からの要望も踏まえて、教育開発推進機構では新年度に向けた教員対象の遠隔授業研修会を企

画実施しました。これまで機構では、コロナ下の遠隔授業支援として、意見交換や情報共有を目的としたオンラインコーヒーズブレイクや、オンライン授業体験会・相談会等を企画実施してきました。また、オンライン授業インタビューを実施し、学部の先生方の気づきや工夫等を共有していただきました。そのようにして得てきた知見や各自の経験を活かしつつ、遠隔授業に関する基礎的な事項を確認することを目的として行われたのが、この研修会です。参加者のアンケート回答等も参考にしつつ、研修会を振り返ります。

【実施日時】 令和3年3月23日(火) 11:00～17:45

【開催形態】 ZOOMによるオンライン開催（後日動画配信あり）

【参加者数】 81名（専任教員24名・兼任教員46名・教育開発推進機構教員4名・事務局7名）

時間	セッション	内容
11:00～ 11:45	①遠隔授業の基本的な了解事項（総論）	▼基礎的な了解事項（授業設計・授業形態についてのイメージ共有・基本ツールの確認）▼授業形態を問わず共通する遠隔授業実施に際しての注意事項、など
12:00～ 12:45	②K-SMAPY IIの操作方法を確認する	▼必要最低限の基本的な操作の確認▼学生とのコミュニケーション確保のための注意事項▼小テストの実践方法、など
14:00～ 14:45	③ライブ配信授業の実施 ZOOMレクチャー篇	▼必要最低限の基本的な操作の確認▼ZOOMレクチャーの基本的な流れ、実施時の注意点、チャットほか機能の活用、など
15:00～ 15:45	④ライブ配信授業の実施 ZOOMグループワーク篇	▼ブレイクアウトルーム利用時の基本的なイメージ共有・操作方法・特徴の確認▼セッション実施時の注意点、起こりがちなトラブル、共同作業を行う場合の工夫、など
16:00～ 16:45	⑤オンデマンド授業の実施 ZOOM・PowerPoint篇	▼動画配信の様々なタイプ▼ZOOM録画・PowerPoint・音声ファイルの作成および配信方法▼オンデマンド授業実施時の注意事項▼フィードバックの重要性、など
17:00～ 17:45	⑥遠隔授業の課題・評価・フィードバック	▼課題の出題方法・評価方法・フィードバック方法それぞれの考え方、留意点▼フィードバックの重要性▼授業形態ごとのフィードバックの実践・工夫例、など

研修会の中身と流れ

総論から始まり、LMSやweb会議システムの操作方法、授業動画の作成方法、課題や評価に関する事等、遠隔授業実施にあたって最低限必要な事柄を中心に研修を行いました。手探りで遠隔授業を始めた昨年度とは異なり、システムの問題点や使い方のコツ、機材や通信環境の問題、学生側の物理的あるいは心理的状況等、わかってきたことも多々あります。それらのポイントを組み込めるのも、二年目ならではの事です。

とくに意識しなければならないのは、学生との双方向性を維持することでしょう。本学では、令和3年度は原則として課題提示型の授業は認められず、大学としても双方向性を重視することが示されました。ZOOM等を利用した即時のやりとりはもちろんのこと、LMSを通じた時間差のあるやりとりであっても、学生に働きかけ、対応し、また必要な情報を漏れなく伝えることが必要です。研修会のいずれの回も、そのような問題

意識をもって設計されました。

機構の教員が一人2回ずつ講師役を務めました。各回のレクチャーはなるべく30分におさめるようにし、質疑応答時間を各15分程度設けました。回によって質疑応答時間に増減がありましたが、どの回も参加者からの質疑が続き、教員が普段いかに悩みや課題を抱えているのかということが伝わってきました。その場では解決できないような質問もありましたが、まずは問題を共有し今後につなげていきたいと思います。

参加者アンケートによると、セッション方式にして興味関心に応じて選択できるようにし、各回を短時間に収めた全体設計は、参加しやすいと好評でした。また、他の教員が苦労や努力をしているのがわかって励まされたというコメントもありました。参加者の様子からは、教員同士の交流の機会も失われていることが窺えます。

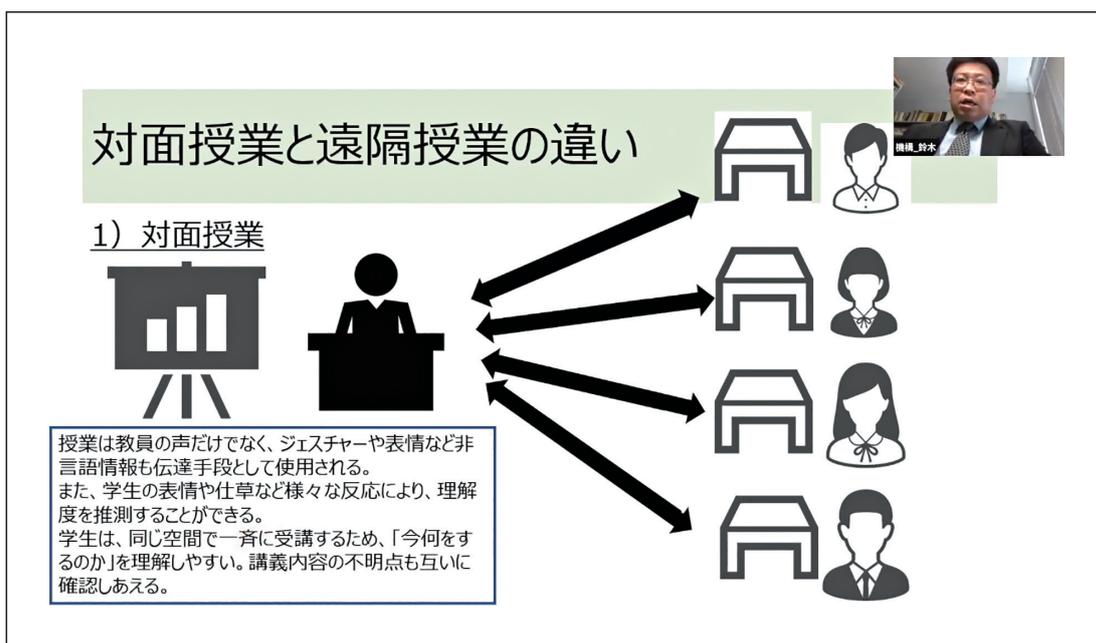
研修会のフィードバック

当日参加できなかった教員や、参加したけれども見直したいという教員のために、当日の内容を録画編集したものをYouTubeで限定公開しました。機構がこれまで教員向けに作成、公開してきた動画の中で抜きん出て再生回数が多く、中でも「オンデマンド授業の実施」が一番となり、教員が何を求めているのかがわかります。これらのことから、実用的な研修には、即時の質疑応答の場が設けられるリアルタイムと、繰り返し見られるオンデマンドとの併用が適しているのではないかと

と思われます。

研修会の中で、学生に対するフィードバックの重要性は繰り返し言及してきましたが、研修会自体のフィードバックも行いました。具体的には、実施後のアンケート回答にあった質問や、当日応答しきれなかった質疑に対する回答等を追加した資料を作成し、配布しました。

今後もよりよい教育支援に取り組んでいきたいと思っています。



教育開発推進機構彙報

(令和3年1月1日～令和3年6月30日)

※肩書き等は当時のもの

行事

○学生オリエンテーション・講習会・試験実施等

- 1月13日：3年生第6回教員就職ガイダンス
- 2月1日：渋谷キャンパス学生対象特別支援学校教諭免許説明会
- 2月5日：令和3年度教育実習予定者書類作成会
- 2月6日～18日：教職春期集中講習会
- 2月12日：TOEIC®学内テスト
- 2月19日：[自宅受検] 学内教員採用2月模擬試験
- 2月26日：TOEIC®学内テスト
- 3月1日～7日：TOEIC®オンラインテスト
- 3月3日～8日：教職合宿代替講習会
- 3月12日：TOEIC®学内テスト
- 3月18日：[オンライン] オンラインパソコンノートテイク体験会
- 3月26日：TOEIC®学内テスト
- 3月31日：学士・編入生教職履修ガイダンス
- 4月1日：[オンライン] 新4年生第7回教員就職ガイダンス
- 4月1日：[オンデマンド] 大学院生教員就職ガイダンス
- 4月2日：[オンライン] 2年生前期教員就職ガイダンス
- 4月3日～6日：1年生教職履修ガイダンス
- 4月6日：教育実習1Bガイダンス
- 4月6日：[オンライン] 3年生第1回教員就職ガイダンス
- 4月7日：3年生教育実習学校交渉ガイダンス
- 4月7日：東京都教育委員会教員採用試験学内説明会
- 4月8日：横浜市教育委員会教員採用試験学内説明会
- 4月9日～5月1日：教員採用試験対策直前講習会
- 4月14日：[オンライン] 学生サポーター研修会
- 4月14日：2年目介護等体験第1回ガイダンス
- 4月14日：[オンライン] 千葉県・千葉市教育委員会教員採用試験学内説明会
- 4月14日：神奈川県教育委員会教員採用試験学内説明会
- 4月15日：茨城県教育委員会教員採用試験学内説明会
- 4月15日：[オンライン] さいたま市教育委員会教員採用試験学内説明会
- 4月15日：[オンライン] 川崎市教育委員会教員採用試験学内説明会
- 4月21日：学生サポーター研修会(講師：筑波技術大学 宇都野康子氏)
- 4月21日：スクールボランティア説明会
- 4月21日：[オンライン] 埼玉県教育委員会教員採用試験学内説明会
- 4月23日～6月11日：前期教育小論文講習会
- 4月30日：[自宅受検] 学内教員採用5月模擬試験
- 5月5日：2年生教育実習学校交渉ガイダンス
- 5月11・13日：教員採用試験候補者選考試験支援奨学金説明会
- 5月15日：TOEIC®学内テスト
- 6月7日～7月9日：教員採用試験対策一次対策会
- 6月9日：2年目介護等体験第2回ガイダンス
- 6月9日：1年目介護等体験第1回ガイダンス
- 6月12日：TOEIC®学内テスト
- 6月26日：TOEFL ITP学内テスト
- 6月30日：[オンライン] 3年生第2回教員就職ガイダンス
- 6月30日：[オンライン] 学生サポーター研修会(講師：筑波技術大学 宇都野康子氏)

FD活動、教育支援

- 3月8日：[オンライン] 令和2年度FD推進助成(甲・乙)事業成

そつ たく どう じ
啖 啖 同時

— 編集後記 —

令和3年度は、オンライン授業を継続しつつ、受講生50名以下の授業では原則対面という方針の下授業が行われました。キャンパスに学生の声がかえ、大学が大学「らしさ」を取り戻したように感じます。今回は、新機構長および各センター長の挨拶を巻頭に置きつつ、昨年度の振り返りの特集しました。まず、教職センターの特集では、教職に関する様々な対応やまた活動に向けて工夫した様子が見られると思います。また、前号に続く学生へのインタビューでは、様々な視点からこの1年半を振り返ってもらいました。学生それぞれが、この困難な状況の中で考え、工夫して学んでいる姿を見ていただけないでしょうか。一方、遠隔授業に関する研修にも多くの先生が参加してくださいました。教員も、学生の期待に応えようとしています。
限られた中ではありますが、これら学生の声や教職員の努力をご覧いただければ幸いです。(鈴木)

果報告会

- 3月23日：[オンライン] 令和3年度に向けた遠隔授業研修会
- 4月1日：令和3年度第1回新任教員研修会
- 6月28日～7月31日：[オンライン] 第2回新任教員研修会
 - ①「國學院大學校史」(講師：渡邊卓 研究開発推進機構准教授)
 - ②「学習成果の可視化—成績評価とフィードバック—」(講師：小濱歩 教育開発推進機構准教授) ※②は第1回FDワークショップと合同開催

情報収集・外部研修・セミナー参加等

- 2月5日：[オンライン] 日本学生支援機構令和2年度「障害学生支援専門テーマ別セミナー【コロナ禍における障害学生支援】」(佐川)
- 2月15日：[オンライン] 筑波大学ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター(DACセンター)1月22日 筑波大学教育関係共同利用拠点事業 FD/SD研修会「発達障害学生に対するテクノロジーを用いた修学支援」(佐川)
- 2月20・21・27・28日：[オンライン] 大学コンソーシアム京都第26回FDフォーラム参加(機構専任教員)
- 3月6日：[オンライン] 3大学(法政・明治・関西大学)合同IRフォーラム参加(小濱)
- 3月10日：[オンライン] 中部大学FD・SD講演会「遠隔授業におけるハラスメント防止」参加(小濱・鈴木)
- 3月13日：[オンライン] 日本アカデミック・アドバイジング協会(JAAA)設立大会参加(佐川)
- 3月16日：[オンライン] 関東圏FD連絡会(野呂・新井・小濱・仙北谷・原田)※本学開催
- 4月13日：[オンライン] ベネッセコーポレーションWEBセミナー「これからの数理・データサイエンス・AI教育を考える会～高等学校の情報教育の変化、今後の大学教育検討のポイント～」参加(新井・小濱)
- 5月16日：[オンライン] 関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会定期総会・東京地区教職課程研究連絡協議会合同研究大会参加(坂入)
- 5月22日：[オンライン] 全国私立大学教職課程協会定期総会・研究大会参加(坂入)
- 5月25日：[オンライン] 筑波大学FD/SD研修「高等教育における脳の多様性(ニューロダイバーシティ)」参加(佐川・鈴木)
- 6月4・9日：[オンライン] 帝京大学FDフォーラム「大学の授業運営における著作権への考え方について」・「授業に伴う著作権等の処理(令和3年度版ガイドラインを検討する)」参加(小濱)
- 6月5日：[オンライン] 大学教育学会第43回大会参加(小濱・佐川・鈴木)
- 6月26日：[オンライン] 都内私立大学教職課程事務担当者懇談会研究会参加(大島)

刊行物・WEB公開

- 1月15日：『國學院大學FDハンドブック改訂版』
- 1月31日：『令和元年度 学生による授業評価アンケート分析報告書』
- 3月1日：『教育開発ニュース』Vol.23
- 3月1日：『國學院大學教育開発推進機構紀要』12号
- 5月31日：『令和2年度FD推進助成(甲・乙)事業 成果報告書』

教育開発推進機構NEWSLETTER『教育開発ニュース!』第24号 令和3年9月1日発行

発行人 石川 則夫 編集人 小濱 歩・鈴木 崇義

発行所 國學院大學教育開発推進機構 〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28